

# 黄色い晩

小川未明

青空文庫



垣根の楓かえでが芽を萌ふく頃だ。彼方あちらの往来で——杉林の下の薄暗い中で子供等らが隠れ事をしてる。きやつきやつという声が重い頭に響く。北から西にかけて空は一面に黄色く——真黒な雲がその上に掩おおい被かぶさつて、黄色な空をだんだんに押しつけて、下に沈ませているようだ。刻々に黄色な空が減じて終しまには一直線となつて、はつきりと地平線から此方こちらを覗き込んでる。それが厭らしい細長い眼付で笑つてゐるように思われた。

悪寒わるさむ寒い風が北方の海から吹いて来る。煤すすけた障子を閉めて灰色の壁に向つた周蔵は、頭を手てぬぐ拭ぬぐで鉢巻して、床の上に起上つて考え込んでいた。障子も一時は黄色に見えたが漸次ぜんじ薄暗くなつ

て、子供等の鬼おにごと事の声も遠ざかってしまうと、遙かにボーツ、ボーツと蒸気船の笛の音が聞える。三里彼方かなたの直江津の港を今しも出帆する汽船が新潟に向つて立つたのであろう。

この時、私は周蔵を訪れた。

周蔵は三十二三の若者である。唇の尖つた色の浅黒い丈夫そうな男である。彼は村の吉沢という家の次男で、この頃一人この家に別家したので、彼は独身者である。僅わずかばかりの金を別わけてもらつて、その日その日を何もせず暮しているのであつた。昼でも彼は臥ねころんでいる。いつ行つて見ても彼はごろりと臥ねころんで何かむしやむしやと食べていた。

「周さん鳥が来たから指しておくれよ。」と沢山ひわ鶉が裏の松林に  
来た時に行つて頼んで見たが、

「厭だ。」といつて受け合あわなかつた。

彼の家うちというのは三軒長屋の中である。去年あたりまで天理教  
の行者が住んでいたのであつた。

その行者というのは、頭の禿げた目尻の垂れた口くちがる軽な、滑稽  
じみた男であつたがたえず信者を集めて、加持祈祷かじきとうをしていたの  
で、今周蔵のいる家はその神様を祭つた場所である。行者は西隣  
に住んでいた。今一軒の家には小学校の教師が住んでいたが、今  
でも尚なお住んでいる。

その頃周蔵のいる家の前は、往来に出るまで圃はたけの中に細道があ

つて、その道の両側に檜かしの木や、榛はんの木や、桜の木や、椿の木が植うえられてあり、木の根には龍の髭ひげが植うえられてあつた。私はよくこの木の下に来て龍の髭ひげに生なる青い実を他の多くの子供等と共に争つては取つたものだ。真夏の時分には檜かしの木の葉がちらちらと日光に輝いて赤い実が葉隠れに見え、蜻蛉とんぼが来ては頭の上をぐるぐると舞つているのを独り欲しそうにその木の下に佇たたずんで、赤い実を見上げていたこともある。

今周蔵のいる家は、全く変つていて前には、格子戸が閉たつていた。中は薄暗く、鏡が光つて、大きな太鼓と榼さかきに白紙の結び付けられた生花と、御幣ごへいと、白い徳利とくりとが目に入つて、それに賽銭さいせん箱すが直すぐ格子戸きわの際きわに置かれてあつた。また賽銭箱の上にはだら

りと赤、白、紫の交りの紐がたれさが垂下つていて、青錆の出た鈴が上に吊されていた。其等それらの紐は、多くの人々の手垢に汚れて下の方が黒くなつていたことを覚えている。その他堂の中には献納の絵額が五枚も六枚もかかつていた——毎月、三五の日には近隣の信者がこの狭い堂の中に集つて、加持祈祷をしたので、その日には禿頭の行者は、時に応じ火渡りだの、刃やいば渡りなどをして見せたこともあつたという——僅かにそれが一年の後には、その行者は旅へ行つてしまつて、その跡は全く變つてしまつた。今迄あつた桜の木や、檜の木は他へ移されてしまい、真直まっすぐに往来に通つていた参詣人のための、道は耕されて圃となり、堂は造り代えられて、勝手かつてもと許や便所まで附け加えられて、全くの普通の長屋と

なつてしまい、その跡に入つて来たのが、周蔵であつた。

周蔵は独身者であるから、神様を祭つてあつた跡に入つても、決して汚けがれはしないから、罰ばちが当たらないだろうと近所の人はいつていたが、入ると間もなく彼は病氣にかかつた。多分風をひいたのだろう。明日あすになれば快なおつてしまうと、彼は昨日あたりまで平気で床の中に横よこたわつていたが、今日はなかなか苦しうに見えた。私はいつも来るので、黙つて戸を開けて彼の枕まくらもと許もとに行つた。周蔵は黄色な眼付をして私の顔を見て黙つている。灰色の壁には、今年の暦が貼つてあつて、火鉢の上には煎せん薬やくの入つた土瓶どびんがぶつぶつと沸き立っている。一種、眼くらの眩くらみそうな臭においが室内みなぎに漲つ

て、周蔵は起上つて坐つていたが、私の入つて来ると同時にまたごろりと眠ねころんでしまった。

「周さん、頭が痛むかい。」

と私は、始めて言うのと、

「ああ、頭は破われそうだ。大分熱がある。」と答えた。

「この薬を飲むんでないのかい？」

と私は、ぶつらぶつらと黄色い泡を立てて沸き上つている煎薬の土瓶に目を止めていうと、周蔵は後向きに臥ねているままで、それには黙つて、

「あ——苦しい。苦しい。」といていた。

「ああ、周さん、薬が沸にえ溢こぼれるよ。」というのと、

「ああ、苦しい、下おろしておくれ。其そこ処まで行けねえ。」  
と、いつて例の尖った口先を心こころ持もち此方こちらに向けて頼んだ。

私は、袂たもとでその沸えたぎっている煎薬の土瓶を下して、周蔵の言うがままにそれを茶碗に移して枕許もっに持もって行いってやると、彼はむくりと起き上あつて、熱いやつをふうふうと吹き出した。

私は、黙もつて彼の枕許もっに坐まつて見ていた。

やがて、大分冷めた時分に、周蔵は醤油色をした、臭はげの劇はげしい煎薬の茶碗を取上げた。最初は眼つぶを閉つつて、尖とった唇くちで何か甘い物でも飲むような調子で悠ゆ然たと吸すい始めたが二口、三口目から、彼の顔かお付つきは怖こしく変かつて、口は耳許みみまで裂ひけたように薄黒い齒はをむき出して、大きな口を開けて、眼めは險けしげに光あつた。私わたしはい

つもの周蔵でないように怖ろしかった。周蔵は薬を飲むとまた苦しそうに呻吟うなり出した。私は家へ帰ろうかと思つたが、いかにも周蔵の苦しんでいるのを見捨てて帰るに忍びなかつた。で、

「周さん、どんなに苦しいか。」と聞いた。

「死にそうに苦しい。」と彼は答えたがその声すら、重々しかつた。室の内へやは熱臭く、煎薬の臭いで一ぱいになつて、私もどうやら頭が痛み出して来た。

「私は家へ帰るよ。」と半分周蔵に気兼きがねをして、——この儘まま彼の苦しむのを見捨てて帰るのが不人情のようで心に咎とがめたから——声が戦ふるえたのである。すると周蔵は私の名を呼んだ。

「正雄さん、私わしの家へ行つて母親おふくろに来ていってくれないか——

「今夜にでも私は死にそうだ。」と彼は急に苦しみ出した。

私は死ぬるといふことは偽うそだと思つた。しかし風をひいても、ちよつとした病氣でも、晩ばん方がたになると重くなると聞いていたから、それで周蔵も斯こんな様に苦しみ出したのだ、とは子供心ながらに思わぬでもなかつたが、彼の様子は實際苦しそうであつた。

「母親がいなければ仕方がない。町へ行つて針医さん呼んで来てくれないかね。」

と苦しみながらも、私に言葉を柔やわげわらて願うようにいつた。

もう室の内は臥つてけいる彼の顔が見えぬ迄暗くなつたのである。私はランプを点つてけやろうかとも思つたが、何処どこにランプがあるの

か分らないので、直すぐさま様家を飛び出して、彼の母親に告げて、針医を迎いに行つてやろうと思つた。

外に出ると黄色かつた空は、いつしか灰色に黒ずんで、空には重たらしい押え付けるような黒雲が、私の村の上を去らずにいた。その雲の中でも最も真黒な所が周蔵の家の頭になっている——私は全く日の暮れないうちに行つて来ようと一生懸命に駆け出して、むらはずれ村端の周蔵の実家に駆け付けたのである。楓の生垣をした村の細道を通り、暗い杉林の下に出たが、もはや遊んでいた子供等は、いずれも散じてしまつて、誰もいなかった。私は気味が悪かつたが、眼を閉いふさいで口の中で一いちツ、二にツとかけ声を出して、自みずから勇気をはげまして駆け出した。私の下駄の力の入つた踏み音の

みが、四境あたりの寂しさを破って響いた。脊中にはしっとり汗ばんで顔が熱ほてったけれど、彼の実家に行つて用を済すまして更に町へ行つて、針医を呼んで来なければならぬ重役を帯びていた——それにしても、私の母親は私の帰りの遅いのを心配して、今頃外に呼びに出ているかも知れないと思つた時、益ますます々速力を疾はやめて、周蔵の実家を目ざして駆け出した。

彼方に桑圃が一面につづいている。その奥の奥にちよつと藁屋が見えた時に、私はもうじきだと心のうちで独りで囁ささやいた。

「一ツ二ツ。」とかけ声を出して、やっと周蔵の実家の戸口に駆け付けた。ちようど夕飯時で、ランプの下には膳を据えて、彼の実兄と嫁とが嬉しそうに飯を食べていた。兄というのは四十近い、

肥ふとつた顎髭あごひげの沢山にある脊の低い男で大工である。いつも笑顔をしてているが、これで弟などには情じょうあい合あいが薄いと聞いていた——彼の母親は見つかからない。私は余りに駆けたので、急せきこ込んで、碌ろくろく々ろくろく声も出なかつたが口くちばや早はやに、

「周さんが病気だから早く小母おぼさんに来てくれいと周さんがいつたよ。」と戸口から大声に告げると、彼の兄かいというのが、

「ハア、母親おふくろは今湯に行きやしたから、帰かえれば直ぐ行くといつてくんない。大きおおに御苦労おおでした。」と立上りもせず——箸しよを持ったまま答えた。嫁よめというのも一寸ちよつと此方を振向いて、

「大きに御苦労さんでした。」といったばかりである。

私はあまりのあつけなさに腹立しいというよりは気抜けがした。

「苦しいと、うなっているのだから早く来ておくれよ。」

といい残すとその家を出たが、急に周蔵が可哀そうになって彼の兄が憎くなくなった。それだから私は大声に軍歌をうたつて、聞えよがしに怒鳴どなつてやった。

「ああ正成まさしげよ正成よ……。」と口から出るがままに大声で叫わめいび、

この村に響き渡れ！ 彼の兄と嫁との耳に鳴り響いて鼓膜を破つてやれ！ という意気込みで怒鳴り付けた。いつしか私は暗い杉林の下を通り抜けて、町へと急いだ。中途からは全く軍歌も止めて、私は又考え込んで途みちを歩いた。今頃私の母は私の帰りの遅いのを待つて、心配しているであろう……しかし周蔵のために遅くなったのだから……言い訳が立つと考えた。

考えながら、途を歩いている間にも、周蔵の兄がランプの下で飯を食べていた姿が目には浮ぶ。ついで、暗い熱臭い室の中でうめいている周蔵の、黄色い眼付が目には浮び、うなり声が聞えるようだ……私は、また駆け足を始めた。

「一ツ、二ツ。」と口の中うちで言つて、全速力を出して町へと行つた。

やがて町へ入つた。軒の低い、柱の曲つた雁木がんぎがうねうねとつづいて、大抵の家は燈火あかりをつけていたが、まだ燈火を点つけずにいる家もあった。朝出て帰つて来た車くるま引まひきなどは、家の前に荷車を置いて、上からいろいろの道具を取り下しているのもある。ま

た、私より一歩先に道具箱を担いで、帰つて来たばかりの大工の家もあつた。其様な家の内の光景などを一々覗き込んで、町の中程になっている按摩の家を訪ねた——家は九尺二間で裡は真暗である——私は「今晚は。」といつて入つた。

暗がりの中で、ごとごとさしている音が聞えたけれど、私の声に返事をしない。

「按摩さんはいるかい。」といった。

「ハア……。」と、力のない老人の声が耳に入つた。

「今直いますぐに来ておくれ、大病人があるから。」といった。私は大病人といわなければ按摩や医者などは直に来ない。だから、呼よびに行いく時は大病人といった方が一番いいと誰やらがいったことを覚え

ていたのでそういった。

「何方様どちらですかえ。」と、暗がりから老人は聞いた。

「一番前の長屋だよ、早く来ておくれ。」

「お堂のあつた辺あたりですかえ。」

「あすこの家だ。」

「あの跡あとへ誰か入りましたかね。」

「周さんが入つたのだ。」

「ああ、吉沢の次男ですけえ、あの人が悪いんですかえ。ハア直に行きやす。」

「直に来ておくれ。」

「あなたと一しよに行きやす。」

と、直に按摩は仕度にかかった。私は暫らく、戸口に待っている  
と、こつこつと杖を捜す音がして、はや下駄を足につっかけてい  
るらしい。私は、他に誰もいないのかと思ったが、やはり暗がり  
で誰やら、ごとごとやっている音がする。私は婆さんがいるのだ  
なと思った。

爺さんは按摩で針医を兼ねている。手に大きな箱を垂ぶらさ下げてい  
た。盲目で竹の杖を突きながらとぼとぼと私の後方うしろについて来た  
が、途中から、私に手を引いてくれいといった。私は按摩の手を  
引きながら、低い、暗い、凸凹のあるうねうねと曲った町の雁木  
下を歩いて、やがて村へ差しかかったのである。西の山は真黒く

浮き出ている。空には黒雲の間から、稀まれに星の光りが見えた。暗い物凄い晩である。先刻さつきまで黄色かった空の名残は、殆どほとんもは見られなかったが、思いなしか、西の空は何処やら薄黄色ばんでいるようにも思われた。按摩は腰が曲って黒の羽織を着ていた。手は筋ばって痩せ衰えている。全くの盲目で一寸先も分らないといった。私は早く帰りたいかったが、按摩の手を引いているので思うように歩けなかった。

歩きたびガタガタと箱の中が鳴る。箱は木で出来ている真黒な四角な箱であった。私は箱の中に針や、薬や、いろいろな道具が入っているのだと思ったから、

「この箱の中に針が入っているの？」と聞くと、

「ハア、左様でげす、これが私のわしの商売道具です。」と言った。

「針を打つのは痛くないかい。」

と、私は光っている鋭い針が肉に突込まれるのを想像していった。

「少しは痛う御座いやす。針ていうものは効果ききめの恐ろしいものでいきしに生死にかかわるものでげす。」

といった。

私は、生死にかかわると聞いてびっくりした。

「針を打つて死ぬことがあるかい。」と問うと、

「それは、二つ一つの針がありやす。もう助かるか助からぬ時に打つ針で滅多めったに打つことの出来ぬ針でげす。」

と答えた時に、私は周蔵の病気はこの二つ一つの針を打たなけれ

ばならぬのではないかと不安でならなかった。そう思つて、この  
痩せ衰えた盲人めくらを見ると、何となくこの盲人が怖いように感ぜ  
られた。二人はその後無言であつた。私の手は折おり々おり戦ふるえた。暗  
い杉林の下を通り、また桑圃を抜けて、だんだん周蔵の家の近く  
に來た時按摩は私に向つて、

「お堂の前の途は、まだありやすかえ。」と聞いた。

「いや、もう無くなつてしまつた。」

又按摩は、

「圃になりましたかえ。」と聞いた。

「アア、圃になつてしまつた。」と私は言つた。

按摩は、しばらく黙つていたが、また、

「大<sup>で</sup>けえ榛の木があつた筈だが、あれは伐<sup>き</sup>りやしたかえ。」と問うた。

「あの木は去年枯れてしまった。而<sup>そ</sup>して今年の春伐つてしまったよ。」と私は答えた。

「あの木は村の鬼門に植<sup>う</sup>つている木で昔からある木でげす……。」「と按摩は言つた。私は何<sup>ぞ</sup>んだか慄<sup>ぞつ</sup>として、

「針を木に打つても快<sup>なお</sup>らないか？」と聞くと、

「ハハハハハ。」と、按摩は齒のない口を開けて冷<sup>ひ</sup>かに笑つた。

何故笑うのだから私には分らなかつた。私はただ黒い箱に目を止めて不思議でならなかつた。二人はやつと、周蔵の家の前に来た。

私は母でも迎いに來ていはしないかと思つて、耳を澄したがそれ

らしい声も聞えなかった。また周蔵の母親おふくろの来ている様子もなかった。家の内は燈火の点いた様子もなく真暗である。もと西隣の行者が住んでいた家は、今も尚お借り手がなくて空家あきやであった。東隣の小学校教員の家は、はや雨戸を閉めてしまった。真暗な家の中から周蔵の苦しんでうめく声が聞える。私は思わず其処ただずに佇んだ。

きっとこの盲人は二つ一つの針を打つだろう……而して周蔵の命は助かるまい。

ああ、どうしよう……この儘、私は按摩の手を振り放して逃げ出してしまおうかと立止って、按摩の様子を見守ると、按摩はしかと私の手を握って頻しきりに前へ出たがって身体をもじもじさして

いた。

# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑  
摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集2 小説集※」[#ローマ  
数字2` 1-13-22] 講談社

1979（昭和54）年5月6日第1刷発行

初出：「早稲田文學」

1909（明治42）年4月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 黄色い晩

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>